

規格活動への評価と人材の育成を

深尾 正 (東京工業大学 名誉教授)

1990年6月から97年9月までTC22国内委員会委員長を仰せつかることになったのであるが、ずっと大学で生活してきた者にとって規格の重要性は言葉では理解できても、実際の作業は総て企業からの幹事、幹事補佐の方々にお任せせざるを得ず、これらの方々の努力には今でも頭の下がる思いで一杯である。

ちょうど委員長在任中に欧州連合が成立し、規格に対してもIECとCENELECとの並行審議・投票が行われるようになって、審議手順やTCのscopeの見直しが行われた。また、欧州への輸出機器への規格の適用が厳しくなるように大学にいる私にも思われた。しかし、企業の規格への対応が遅いのではないかと不安になり、さらに、幹事、幹事補佐の方々はもとより、委員の方々の活動が職場で評価されていないことが気になっていた。

わが国の技術を反映して、国際的な競争に不利にならないような規格を成立させるためには、規格案に対して変更・修正を求めてもほとんど無力で、原案作成のWGへの参加が必要だと思われたが、委員に参加をお願いしても企業の担当者を納得させるのが難しいという状況であった。

そこで、WGやSCへの出席をお願いした委員の上司の方へ委員長名で出張依頼の手紙をお送りしたり、委員会に出席されている委員の属する企業の社長さんには規格の重要性と規格に携わる技術者の育成・評価をお願いする文書を送るなどの努力をしたものであった。

最近では、IECの重要なポストやコンビナにわが国の技術者が就任する機会が多くなり、規格活動に貢献された方の表彰制度ができるなど、規格に対する認識が高まったことは大変に喜ばしいことと思う。

しかし、規格活動だけでなく、学会活動に参加される企業からの技術者、研究者が減ってきているように思われ心配である。

改めて、企業の上層部の方々には規格に対する一層の理解と、規格に携わる人材の育成をお願いしたい。